

## 初め声高、次言い逃れ、最後沈黙

今年上半期、舛添要一・前東京都知事、甘利明・前経済再生担当相ら政治家たちの記者会見での弁明、あるいは事情説明を聞いていて、なんと不誠実などの感をもった。政治家というのは、国民に向けてその場逃れの言を弄（ろう）し、都合が悪くなれば、人によっては自らの代理人を第三者の名目で利用するのが慣行でもあるらしいのだ。政治家の国民に向けての弁明に接するたびに、その論に一定の法則があることに気づいてくる。

この法則とは、太平洋戦争下での公式戦果発表のいいかげんさに通じている。この戦果発表は、「大本営発表」という語で語られていて、今では虚偽や詐話の代名詞になっている。3年8カ月続いた太平洋戦争の期間、大本営発表は846回行われた。第1回は歴史に語られている内容で、「大本営陸海軍部十二月八日発表。帝国陸海軍は本八日未明、西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」だ。これが昭和16（1941）年12月8日午前6時である。

それから太平洋戦争終結直前の昭和20（45）年8月14日まで続いた。そして8月21日から26日まで「大本営及帝国政府発表」の名称で6回行われ、計846回になる。

「大本営発表」は戦時指導を担った大本営の中にある報道部門から発せられるのだが、戦時下の国民はこの発表を通じて戦況を知ることになる。この発表以外の内容を口にすると、流言飛語をまいたとして罰せられる。ひとたびこの発表がうそ、偽りとなったら、国民は現実とはまったく異なる虚構空間に身を置いてしまう。現実にはそのようになってしまったのだ。

3年8カ月の太平洋戦争は、「勝利」「挫折」「崩壊」「解体」「降伏」の五つのサイクルを持っている。「勝利」は緒戦の半年ほど、「挫折」はミッドウェー海戦から山本五十六・連合艦隊司令長官の戦死まで、「崩壊」は昭和18（43）年12月の中部太平洋での敗退、「解体」はサイパン陥落を挟んで、レイテ決戦、そして昭和20（45）年3月の硫黄島陥落まで、「降伏」は沖繩戦以後の日本軍の全面的敗北である。つまり日本は緒戦の「勝利」を除いて、戦局が好転したことはなかった。「大本営発表」はこの戦況をどう伝えたか。

「勝利」のときは、とにかく次から次へと発表する。846回のうち、昭和16（41）年12月8日から31日までは80回余も発表がある。そして「挫折」のときは言葉を言い換え被害を少なめに発表する。「崩壊」に至るとその内容で、日本軍が受けた被害の大きさが米軍側に与えたものになったりする。「解体」ではうそ、言い逃れ、被害と加害のすり替え、なにより発表日数も極端に少なくなる。そして「降伏」になると、発表は月に2回から3回となり、つまりは黙ってしまうのだ。

調子のよいときは何度も誇らしげに語り、都合が悪くなると言い逃れ、うそ、すり替え、そして最後は沈黙してしまうという法則を「大本営発表」の内実を分析していくとくみ取ることができる。何ともわかりやすい構図で、現実から逃れるわけである。

舛添前知事の弁明は、典型的な「大本営発表」型の法則に基づいている。初めは私的費用を政治資金にくみこんでいることに法的にはなんら問題ないと開き直っていたのに、その内容を明確にせよとなると、言い逃れ、すり替え、あげくに政治的側近の名前を明かすよう迫られるや、実は虚偽を口にしていただけと思われるような弁明をくり返す。

最終段階では、沈黙の中に逃げ込んで、現実を目を伏せる。前知事のこの弁明のサイクルは、不都合を糊塗（こと）するときの人物や組織の常とう手段で、甘利氏にもこの構図がうかがえた。

そして、というべきなのだろうが、このような弁明のサイクルを用いる人物や組織は、本筋から外れた部分やさして重要と思われない部分では逆に饒舌（じょうぜつ）になる。「大本営発表」では、戦況が思わしくない、あるいは絶望的な状況にあることを感じさせないために、将兵が玉砕していく様子が詠嘆調に語られて、事実そのものを隠そうとする。

舛添前知事も、書道のために中国服を購入したことを政治資金として認めさせようと、あれやこれやと言いつつた。その饒舌さに驚きながら、この人はこの言い方で重要なポイントをずらしていくのだなと誰もが分かる。

政治家の逃げ口上に、大本営発表の法則をあてはめていくと、実は日本社会そのものが、不都合な現実から目をそらすときは、こういう弁法を用いていると理解すべきだ。私たちは、初めは声高で威勢よく、最後は沈黙で事態を乗り切る「日本式遁辞（とんじ）」を見抜くべきではないだろうか。